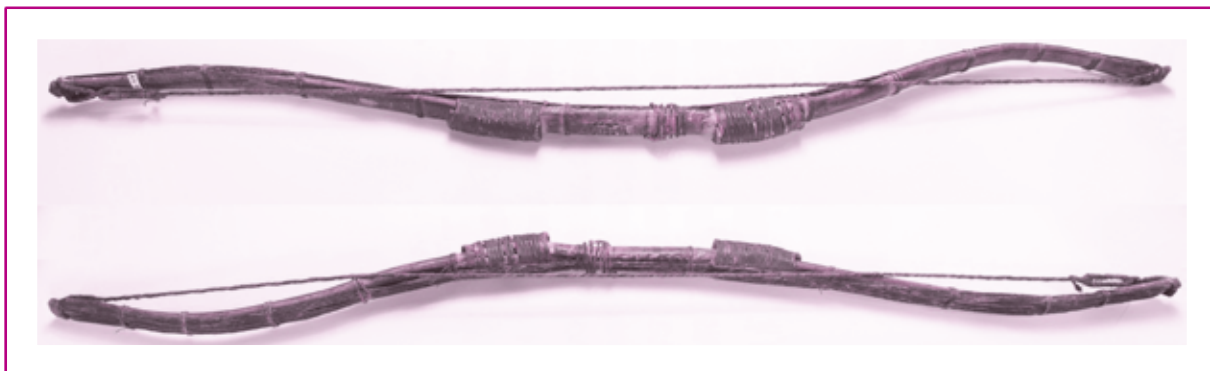




北方民族博物館だより

No.142



H3.13 骨角製弓（両面） エスキモー／アラスカ 19世紀
長さ85.1 cm 中央幅2.3cm（正面）×2.1cm（側面）
写真上手前が腹側（弦を張る側）、写真下手前が背側

大型動物の骨角を主な素材としたエスキモーの弓。背側には10～12本の腱の編紐が弓幹（弓本体）と平行になるように貼り付けられ補強されている。腱を貼るため、背側は腹側より全体的に平たい。シベリアの最北東端から北米北極域、グリーンランドにかけて分布するこうした弓を、ケーブルバック弓（cable-backed bow）という。

弓把（中央部）の上下二か所、腹側と背側それぞれに骨角製の補強材が取り付けられている。腹側にある板状材は長さ6.7cm／最大厚8mm（出っ張っている部分）、背側にあるイカの甲のような材は長さ10.5cm／最大厚5mm（写真では隠れて見えない）。この二つのパーツで弓幹を挟み、上から皮紐を巻きつけて固定している。

腱製の弦はS捻りで、太さ3 mm。両端に弦輪があり、片方のみ2つの弦輪が腱で連結されている（写真上では左端、写真下では右端）。経年劣化のため、本来腹側に張られているはずの弦が緩んで、背側にはみ出ている。

目次 Contents

- 1 表紙
- 2 ロビー展「コリヤークにみる究極の毛皮リメイク術」
／講座「アイヌ通辞・能登屋円吉の業績」
- 3 第41回特別展「海獣が支える極北の暮らしーカヤックからアクセサリーまでー」
／特別展解説講座「海獣が支える極北の暮らし」
- 4 特別展関連講演会「オホーツク海におけるアザラシ猟と、極北の暮らしに不可欠な海棲哺乳類の生態」
／研修会「教員のための北方民族文化入門」
- 5 講座「北をめぐる語りと朗読ー旅する詩人たちの北極圏ー」
／上映会「北方民族博物館シアター夏・秋」
- 6 INFORMATION



ロビー展

コリヤークにみる究極の毛皮リメイク術

2026.5.30(土)～6.21(日)

シベリアの北東地域に暮らすトナカイ・コリヤークの人びとは、トナカイを家畜として飼育し、その毛皮を巧みに使い分けて生活に必要な住居や衣類の素材としてきました。本ロビー展では、トナカイ・コリヤークによる多様な毛皮利用のなかでも、とくにトナカイ毛皮の「リメイク術」に注目し、約30点の実物資料とフィールド写真を通して紹介しました。

大きく三つに区切られた展示会場のうち、最初のコーナーでは家畜トナカイを投げ縄で捕獲するところから、毛皮を剥ぎ取り、鞣し、染色するところまでを紹介しました。

二つ目のコーナーでは、鞣されたトナカイ毛皮が夏期用天幕住居である「ユルト」のカバーとして、また住居内を仕切る帳として利用されることを紹介しました。ここでは、ユルトの大きさを実感してもらうためにA1サイズ6つ分の大きな写真を壁に設置しました。ユルト内の中央には火を焚く炉が置かれます。そこから発生する煙によって、ユルトカバーや帳に使われた毛皮が「燻される」ことで、その後の「リメイク」の下準備が整います。

三つ目のコーナーでは、住居の素材から夏用の衣類へと「リメイク」される工程について紹介しました。ユルトカバー等として煙で燻されたトナカイ毛皮は、その後、必要に応じた大きさに裁断・刈毛され、夏用の衣類の素材となります。トナカイ・コリヤークの人びとによれば、燻された毛皮は防水性、防虫性をはじめとする多くの優れた性質を獲得します。このような毛皮から作られた衣服は、湿度が高く、蚊が大量に発生する夏のツンドラで生活するうえで大変重要です。実物資料としては、成人男性、成人女性、子ども用の夏用燻しトナカイ皮製衣類一式をそれぞれ展示しました。

観覧いただいた多くの方々に、トナカイ・コリヤークの人びとによる無駄のない毛皮利用の知恵を知っていただくことができました。(学芸グループ 佐藤重吾)



子ども用の夏用燻しトナカイ皮製衣類
(左から上着、つなぎ、おむつ、靴、蚊よけのフード)

講座

アイヌ通辞・能登屋円吉の業績

2026.5.30(土) 10:00-11:30

講師：松尾 隆氏 (当館研究協力員)
宮川 琢 (当館学芸員)

当館研究協力員の松尾隆氏と当館の宮川琢学芸員(当時)を講師として、19世紀に活躍した和人のアイヌ語通辞(通訳)能登屋円吉の謎に包まれた生涯と、彼が明治元年(1868)に執筆した『番人円吉蝦夷記』(以下、『蝦夷記』)の内容に関する講座を開催しました。講師のお二人は、2025年度の公益財団法人アイヌ民族文化財団の出版助成を受けて『蝦夷記』の全文翻刻版(アイヌ語索引付き)を出版されました。

講座の前半では、松尾氏により能登屋円吉の生涯と『蝦夷記』の概要が紹介されました。文化8(1811)年に松前城下福山に生まれた円吉は、20代前半から石狩場所や紋別場所といった当時の和商人とアイヌ民族との交易所(商場)に勤め、そこでアイヌ語を独学しています。松尾氏には、19世紀当時の場所請負制度や通辞、支配人、番人といった各種職業、円吉の雇用主であった「安部屋」の状況など様々な背景についても詳しく解説いただきました。とくに、『蝦夷記』の翻刻作業を通して浮かび上がってきたという円吉の人物像は大変興味深いものでした。

講座の後半は、『蝦夷記』に記載があるアイヌの「なぞなぞ」について、宮川学芸員より解説が行われました。以下にその一つを引用します。何だかわかりますか？

「大戸ヨリ入 小戸ヨリ出ル」

(poro apa orowa ahun, pon apa orowa asin)

正解は「油次」(マトウンキ matunki)です。マトウンキは注ぎ口(すなわち『小戸』)をもつ木製の容器で、片口のような形状のものから舟形のものまであり、当館に収蔵されています。(学芸グループ 佐藤重吾)



講座の様子

第41回特別展

海獣が支える極北の暮らし —カヤックからアクセサリーまで— 2026.7.18(土) ～ 10.18(日)

北方地域、とりわけ樹木がほとんど育たないツンドラを中心とした高緯度地方では、かつては生活に必要な様々な物をアザラシやセイウチ、クジラなどの海棲哺乳類から作っていました。食糧から衣服、狩猟道具やカヤックなどの移動手段、玩具、アクセサリーまで、これら海棲哺乳類の皮や骨、牙などで作られた様々な資料を紹介することを目的として本展示を企画しました。

ツンドラ気候とは、最も暖かい月の平均気温が0℃～10℃の地域を指します。地面のすぐ下には永久凍土が広がり背の高い樹木は育ちません。そのため、交易が始まる以前は、現地で手に入る素材は、土と石、夏の間にわずかに生えるコケ、小低木、流木および海棲哺乳類などの動物由来の物が中心でした。とりわけ、木材のように長くて硬いものは、運が良ければ流木から入手できますが、そうでない場合にはイッカクの牙かクジラの骨に頼っていました。本展示では、海棲哺乳類由来の素材が、衣服、狩猟道具、舟、工芸品の材料としてどのように利用されていたかに焦点を当てて展示を行いました。極北で利用される海棲哺乳類は多種多様ですが、今回の展示ではセイウチ、イッカク、各種アザラシ、ホッキョクグマなどから作られた資料を展示しています。また海棲哺乳類が描かれた絵画などについても紹介しました。

士別市立博物館からは、女優で冒険家の和泉雅子氏が収集した資料をお借りし、セイウチの牙を使った彫刻作品などを展示しました。また、網走市にかつて存在した、「ジャッカ・ドフニ」旧蔵資料と併せて、1970年代にオホーツク海で行われていたアザラシ猟の写真を展示し、北海道や樺太などでの海獣利用についても紹介しました。厳しい環境で暮らす人びとの知恵と工夫をぜひご覧ください（10/18まで）。（学芸グループ 日下稜）



特別展の様子（アザラシやホッキョクグマ毛皮製の衣服）

特別展解説講座

海獣が支える極北の暮らし

2026.7.18（土） 10:00-11:30

解説：日下 稜（当館学芸員）

第41回特別展「海獣が支える極北の暮らし—カヤックからアクセサリーまで—」の開催初日に、特別展解説講座を実施しました。講座の前半は講堂で、スライドを用いて解説を行いました。まず、海棲哺乳類を多く利用する地域と民族について、また利用される動物の種についての説明を行いました。ホッキョククジラやイッカクを除いて、アザラシ類やセイウチ、ホッキョクグマなど、極北の地で利用される海棲哺乳類は、日本の動物園や水族館でも飼育されており、動物そのものの存在は参加した方々にとっても身近に感じられるようでした。反対に、これらを食用や毛皮の衣服、狩猟道具の材料として利用することに関しては、現代の日本ではなじみが薄いこともあり、新鮮味を持って聞いていただけたようです。

講座の後半では、特別展示室へ移動し、実際に展示を見ながら資料の解説を行いました。アザラシの毛皮を使った狩猟用の浮きや、セイウチの腸で作られた防水性のパーカー、氷上でアザラシやセイウチを狩る時に使用する身を隠すためのスクリーン、セイウチのアゴの骨で作られた革ひもをしごいて柔らかくする道具など、一見しただけでは、素材や用途が分かりにくいものを中心に解説しました。参加者からは、用途や製法、現在における利用など様々な質問が出され、充実した講座になりました。クジラの骨を使った縫い針やベルーガの背中の腱を使った縫い糸など、生活に密着した道具については特に関心を持っていただけたようです。また、北グリーンランドの、手作りカヤックによるイッカク猟の映像には、イッカクのすぐそばまで近づいて、鉋を打つシーンが映し出されており、危険と隣り合わせの猟であることも知っていただけたのではないかと思います。（学芸グループ 日下稜）



特別展解説講座の様子

特別展関連講演会

オホーツク海におけるアザラシ猟と、 極北の暮らしに不可欠な海棲哺乳類の生態

2026.7.26(日) 10:00- 11:30

講師：内藤 靖彦氏（国立極地研究所名誉教授）

三谷 曜子氏（京都大学教授・野生動物研究センター）

特別展関連講演会として、オホーツク海における1970年代のアザラシ猟と、海棲哺乳類の生態に関する講座を実施しました。1人目の講師である内藤靖彦氏は、海洋動物生態学がご専門です。オホーツク海におけるアザラシ猟が盛んだった1970年代にゼニガタアザラシなどの調査のため、アザラシ猟船に乗り込み、猟に同行していました。当時、その猟にハンターとして参加していたのが、ウイルト出身のゲンダヌ（北川源太郎）氏だったということです。海水上でのアザラシ猟は、積みあがった水で視界が遮られ、船に戻るための帰り道を見失いやすく危険を伴います。そのような状況でもゲンダヌ氏は、元来た道の地形（海水の様子）を記憶していて、船まで無事に戻ることが出来たというお話をされていました。

2人目の講師である京都大学・野生動物研究センターの三谷曜子氏は海棲哺乳類学がご専門です。これまで、知床やグリーンランドなどで、ラッコやシャチ、アザラシなどの生態に関する研究をされてきました。三谷氏は、ワモンアザラシやタテゴトアザラシ、セイウチ、イッカク、ホッキョクグマなど好水性（出産や休息などを海水に依存）の海棲哺乳類について説明された後、グリーンランドに暮らすアザラシの生態や、発信機を用いたワモンアザラシ追跡調査の様子、水中で録音されたイッカクの鳴き声などを紹介されました。また、北極の温暖化が、氷河や海水、海棲哺乳類、さらにはヒトの暮らしに与える影響についても解説され、改めて気候変動に関する研究の重要性を認識しました。

（学芸グループ 日下稜）



内藤靖彦氏による講演の様子

研修会

教員のための北方民族文化入門

2026.7.30(木) 9:30-12:30

講師：呉人 恵（当館館長）

高橋 磨輝氏、山本 あゆみ氏

（民族共生象徴空間(ウポポイ)工芸・体験学習課）

道立北方民族博物館活用学習のための指導者研修の一環として、小・中・高等学校や特別支援学校の先生や教育関係者を対象とした研修会「教員のための北方民族文化入門」を開催しました。講師を務めたのは、当館より呉人恵館長、佐藤重吾学芸員、民族共生象徴空間（ウポポイ）の高橋磨輝氏と山本あゆみ氏です。当日は網走市内外から12名の方々に参加いただきました。

研修会の第一部では、呉人恵館長が「世界の言葉」と題して講話を行いました。はじめに、2026年時点で7710ほどもあるという世界の諸言語について概観し、地域ごとの特徴や「～語族」「～諸語」「～語」といった概念の違いについて整理しました。後半は、グローバル言語となっている英語が言語学的にみていかに特殊な言語であるか、アイヌ語はどのような特徴をもっているか、また日本語を例として多様な方言が衰退し急速に共通語化している現状について説明されました。全体として、日本語や英語といった身近な言語の捉え方を相対化してくれるようなお話でした。

続く第二部では、ウポポイの工房職員である高橋・山本両氏による「アイヌの刺繡体験」のレクチャーが行われました。具体的には、布のコースターにチェーンステッチ（オホカラ）で文様を施すという内容です。約一時間という短い時間でしたが、参加者のほとんどが刺繡を完成させることができました。こうしたアイヌのもののづくりはウポポイの工房で体験できるほか、学校をはじめとする団体は公益財団法人アイヌ民族文化財団による「アイヌ文化活動アドバイザー派遣事業」を活用して木彫や刺繡、伝統的なアイヌ料理づくりなどを体験することもできます。関心がある方はぜひインターネットなどで調べてみてください。

（学芸グループ 佐藤重吾）



アイヌの刺繡体験的一幕

講座

北をめぐる語りと朗読 —旅する詩人たちの北極圏—

2026.8.1 (土) 10:00-11:30

講師：管 啓次郎氏 (明治大学教授)

中村 和恵氏 (明治大学教授)

小島 敬太氏 (音楽家)

講座「北をめぐる語りと朗読—旅する詩人たちの北極圏—」を開催しました。講師は詩人・エッセイスト・比較文学研究者の管啓次郎明治大学教授、詩人・もの書き・比較文学者の中村和恵明治大学教授、音楽家・作家・翻訳家の小島敬太氏の3名です。朗読会は、中村氏から趣旨説明が行われたあと、第一部は管氏と小島氏が、第二部は中村氏が朗読し、最後に3名で語り合うという構成でした。

宮澤賢治の1923年の樺太行きに触発され、管氏と小島氏は、サミの詩人イマ・アイキオさんが住む北緯70度、フィンランド最北端の町ヌオルガムを目指し、旅をしました。この時の体験が『サーミランドの宮沢賢治』（白水社、2025年）にまとめられています。第一部は宮澤賢治とサーミランドをテーマに、上掲書からの一節や宮澤賢治の「オホーツク挽歌」が管氏により朗読されました。朗読にあわせて小島氏が歌やギターで伴奏されました。このギターはフィンランドへの旅にも持参されたそうで、会場では小島氏の曲「アントロポセン・ブルース」も披露されました。

第二部では中村氏が幼少期をすごした北海道石狩の風景を語りました。1970年の大阪万博に展示されていたスカンディナヴィアパビリオンは、閉幕後石狩に移設されていました。そのなかに展示されていた船を見た記憶に、北方先住民文化を紹介している当館のイメージにも重ね合わせた詩を創作し朗読されました。

朗読をテーマにした講座は当館では初めてのことで、関心をもった方たちで会場は満員となりました。参加者からはこのような機会をまた作ってほしいとの声が聞かれ、朗読と音楽を楽しむひと時となりました。

(学芸グループ 笹倉いる美)



講師の面々 (左から管氏、中村氏、小島氏)

上映会

北方民族博物館シアター夏・秋

【夏】：2026.6.7 (日) 10:00-11:30

講師：佐藤 重吾 (当館学芸員)

【秋】：2026.8.22 (土) 10:00-11:30

講師：日下 稜 (当館学芸員)

季節ごとに開催している北方民族博物館シアターとして、今夏は『東方の記憶』（原題：Eastern Memories、監督：ニクラス・クルストルム、マルティ・カルティネン）という2018年の作品を取り上げました。本作は、20世紀前半に活躍した言語学者であり、初代フィンランド駐日公使として1919年から1929年までの10年間で日本で過ごしたグスタフ・ヨーン・ラムステッド（1873-1950）が遺した手記にもとづき、彼のモンゴル、日本、中国、韓国での思索を、各国の現代社会の情景で構成した、二人のフィンランド人映像作家による意欲的なドキュメンタリー映画です。約100年前に書かれたラムステッドの手記の言葉と、各国の現代社会の映像を織り交ぜる構成は大変興味深く、参加した方々からは多くのご感想をいただきました。

(学芸グループ 佐藤重吾)

北方民族博物館シアター秋として『極北のナヌーク』（原題：Nanook of the North、監督：ロバート・フラハティ、1922年）を上映しました。撮影地はカナダ、ハドソン湾東岸のアンガヴァ半島で、イヌイトの古い暮らしの様子が写されています。日本では当初、『極北の怪異』として、1924年に公開されました。

氷上でのアザラシ猟や銚を用いたセイウチ猟、カヤック作り、氷上でのルアーとヤス使った釣り、イグルーでの食事風景など、現在ではほとんど見ることが出来ない貴重な映像が盛り込まれています。特に、銚を使わずに銚だけでセイウチを狩るシーンは当時の暮らしの厳しさを物語る映像で、参加者の方々は興味深そうに見入っていました。

(学芸グループ 日下稜)



北方民族博物館シアター秋の様子

第40回北方民族文化シンポジウム網走

『人新世の北方文化研究

—環境・先史・現代社会の視点から— ご案内

北方地域を含む世界各地がこれまでになく緊密に結びつくなか、地球規模の気候変動や国際情勢の変化は北方諸民族の文化にも多様な影響を及ぼしています。本シンポジウムでは、40回を記念し、北方文化研究の近年の成果と複雑化する現代における課題、そして今後の可能性について検討します。

会期：令和8年(2026年)10月17日(土)～10月18日(日)

会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター 2000）

大会議室[網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]

内容：国内外の専門家・研究者による研究発表（同時通訳付き）

発表者：エリカ ヒル（アラスカ大学サウスイースト校／教授 [アメリカ]）、タチアナ デガイ（ビクトリア大学／助教 [カナダ]）、飯島 慈裕（東京都立大学／教授）、石井 花織（東北大学東北アジア研究センター／特任講師）、江畑 冬生（新潟大学／教授）、加藤 博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／教授）、岸本 宜久（札幌学院大学／准教授）、佐々木 史郎（国立アイヌ民族博物館／名誉館長）、野本 正博（国立アイヌ民族博物館／館長）、佐藤 重吾（北海道立北方民族博物館／学芸員）

運営委員：加藤 博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／教授）、佐々木 史郎（国立アイヌ民族博物館／名誉館長）、呉人 恵（北海道立北方民族博物館／館長）、中田 篤（北海道立北方民族博物館／主任学芸員）

主催：一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

後援：網走市、網走市教育委員会、北海道民族学会、北海道考古学会、北海道博物館協会

＊参加無料。オンライン参加あり。現地参加をご希望の方は10月1日までに当館までご連絡下さい。道民カレッジ連携講座（予定）。

ほかのイベントのご案内

ロビー展「タイガの彫刻家：トナカイの角に想いを込めて」

会期：2026年10月31日(土)～12月13日(日)

会場：当館ロビー 観覧料：無料 解説講座：10月31日(土)

講習会「羊毛でつくるフェルトの小物」

日時：2026年11月20日（金）9:30-12:30

講師：橋 記子氏（フェルト作家）

講座「北米のアイヌ文化資料」

日時：2026年11月29日（日）10:00-11:30

講師：出利葉 浩司氏（元北海道博物館副館長）

上映会「北方民族博物館シアター冬」

日時：2026年12月13日（日）10:00-11:30

講師：笹倉 いる美（当館学芸主幹）

INFORMATION

行事報告

イベントなど

◆ 6月18日(木)、網走市子育て支援センターどんぐりにて開催された子育て中の方向けのリフレッシュ講座「ひも織り」にて、当館の笹倉いる美学芸主幹が講師を務めました。当日は10名が参加し、平織りのひもづくりを行いました。

◆ 6月21日(日)、「第12回ユハンヌス夏至まつり」を開催しました。昨年と同様お天気には恵まれませんでした、多くの方々にご来場いただきました。記念すべき第20回目となった北方民族博物館モルック大会は、見事「吉田さん」ペアが優勝しました。ほかにも、恒例となっている地元のフラダンスサークルの発表や音楽グループの生演奏、フィンランド風スープの無料配布などがあり、見て・聴いて・食べて楽しい初夏のひと時となりました。



子どもたちのフラダンス披露

調査など

◆ 8月3日(月)～19日(水)、当館の日下学芸員がグリーンランドで現地調査を行いました。現地に暮らして53年になる大島育雄氏へインタビューを行ったほか、グリーンランド国立博物館も訪問しました。インタビュー調査では、50年前の暮らしの様子や、当館のグリーンランド関連資料について聞き取りを行いました。次々号（来年3月発行）の『博物館だより』・『友の会だより』で概報を行う予定です。

本調査からわずか1ヶ月後の9月8日、インタビューに協力いただいたばかりの大島育雄氏が逝去されました。79歳でした。当館の調査活動や資料収集への多大なるご協力に感謝申し上げますと共に、ここに哀悼の意を表します。



大島育雄氏へのインタビュー

はくぶつかんクラブ

◆ 6月27日(土)、はくぶつかんクラブ「白樺の皮の小物入れ」を開催しました。細く切った白樺の樹皮を編みこんで格子状の模様を作る作業は難しかったようですが、最終的には全員が素敵な小物入れを完成させました。



すてきなデザインに仕上がりました

北方民族博物館だより

No.142

令和8年(2026年)9月20日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<https://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会